

## 研究ノート

# 古事記の境界論 — 「坂」を中心に —

姜 鍾 植

はじめに

### 1. 「坂」の機能

- (1) 境界
- (2) 通路
- (3) 要塞
- (4) 呪的な場（祭祀の場）

### 2. 「坂」の形状

おわりに

キーワード：坂、坂上、坂の神、境界

### はじめに

古代人は、世界と世界との間に境界があると認識していたようである。それは、古事記という作品が作り出す神話の世界—葦原中国・黄泉国・根之堅州国・海宮—の間に「黄泉つひら坂」「海坂」といった「坂」が設けられていることから窺われる。この場合の「坂」とは、山・丘などの傾斜地が実際に共同体と共同体との間の境界をなしていることから、これらの世界の間にも境界としての「坂」の存在が連想されやすかったからであろう。

そこで、本稿では、これらの世界の間が存在する「坂」に着目して、古事記における「坂」

が如何なる性格（機能）を有し、また、そういった「坂」が古代日本人に如何なるものとしてイメージされていた（坂の形状）のかについて考察することにしたい。

### 1. 「坂」の機能

まず「坂」の機能についてであるが、古事記中の「坂」の用例を検するに、「坂」には、世界（地域）と世界との間を仕切る（引き分ける）境界としての機能、地域間を結ぶ通路としての機能、戦いの場における要塞としての機能、坂の神（守護神）に国内安泰を祈願したりする祭祀の場としての機能などが考えられ、以下、それらを項目別に取り上げて、用例に即しながら考察する。

#### (1) 境界

古事記に、敵対するものを「坂」の外側に追い払って国を作る例が見える。<sup>(1)</sup>

- (1)かれしかして、(須佐之男命が。引用者注)  
黄泉つひら坂に追ひ至りて、はろはろに望  
けて呼ばひて、大穴牟遲の神に謂らして曰  
ひしく、「その、なが持てる生大刀・生弓  
矢もちて、なが庶兄弟は、坂の御尾に追ひ

(1)引用は、新潮日本古典集成『古事記』（新潮社）、日本古典文学大系『日本書紀』（岩波書店）、日本古典文

学大系『風土記』（岩波書店）、日本古典文学大系『日本霊異記』（岩波書店）による。

伏せ、また河の瀬に追ひ撥ひて、おれ、大  
国主の神となり、…（中略）…かれ、その  
大刀・弓を持ち、その八十神を追ひ避くる  
時に、坂の御尾ごとに追ひ伏せ、河の瀬ご  
とに追ひ撥ひて、始めて国を作りたまひき。

（記上巻、大国主神の国作り）

根之堅州国での試練を乗り越えた大穴牟遲神は、  
須佐之男命の所有物である生大刀・生弓矢を持  
って逃亡する。その際、追いかけて来た須佐之男  
命は、傍線Aのように、「黄泉つひら坂」に立  
ち止まってそれ以上は追おうとしない。それは、  
そこが葦原中国と根之堅州国との境界であるこ  
とを意識しての行動であると推測される。

さらに須佐之男命は、傍線Bの如く、逃げて  
いく大穴牟遲神を呼び止めて生大刀と生弓矢<sup>(2)</sup>  
をもって八十神を坂の御尾に追い伏せて大国主  
神となるよう祝言を送る。ここで重要なのは、  
八十神を「坂の御尾」と「河の瀬」まで追い払  
うことで、それは、「坂」や「河」が地形的  
（自然条件）に地域間の境界をなすことから国  
境線として結びつけやすかったからであろう。  
こういった境界線まで敵を追い払い、境界線の  
内側を領有（平定）することが国を作ることな  
のである。

同じく、対立する相手を「坂」の外側まで追  
いやってその内側を領有する例が風土記に見え  
る。

(2) 甕坂は、讃伎日子、逃去ぐる時、建石命、  
此の坂に逐ひて、いひしく、「今より以後  
は、更、此の界に入ること得じ」といひて、  
即ち、御冠を此の坂に置きき。一家いへら  
く、昔、丹波と播磨と、国を塚ひし時、大  
甕を此の上に堀り埋めて、国の境と為しき。

(2) 大穴牟遲神が国作りにおいて生大刀と生弓矢を用い  
ることは、須佐之男命の強大な力（呪力）が大穴牟  
遅神に継承されたことを暗示的に表している。

故、甕坂といふ。

（播磨国風土記、託賀郡・法太里<sup>ほふだ</sup>）

逃げていく讃伎日子を「此の坂」まで追い払っ  
た建石命は、傍線Cのように、二度とこの境界  
内に入ってはならないことを宣言する。その際、  
相手を「坂」まで追い払うことが重要であり、  
そこで宣言を行うことが注目される。それは、  
「坂」が、そこを基準にして内側と外側とを引  
き分ける境界の故であり、そういった「坂」に  
御冠・大甕（傍線D）を置いて境界のしるしと  
する（境界を確定する）のである。

「坂」に何かのしるしをつけて境界を定める  
ことは、葦原中国と黄泉国との間に存在する  
「黄泉つひら坂」においても見られる（この場  
合は千引石をおくこと）が、それについては別  
稿で述べた<sup>(3)</sup>。

以上、「坂」や「河」の外側まで敵対勢力を  
追い払うことはその内側を領有（平定）するこ  
とであり、その場合の「坂」とは地域間を引き  
分ける境界なのである。

## (2) 通路

「坂」が地域と地域との間の境界をなすこと  
は、言い換えれば、そこが一方の勢力圏と他方  
の勢力圏との接点でもあり、そういった接点は  
両勢力圏（世界）をつなぐ重要な通路として機  
能する。次の例を見よう。

(3) しかして、豊玉毘売の命、その伺ひ見たま  
ひし事を知らして、心恥しとおもほして、  
すなはちその御子を生み置きて、白しく、  
「あれ、恒は海つ道を通して往来はむとお  
もひき。しかれども、あが形を伺ひ見たま  
ひし、これいと忤し」とまをして、すなは

(3) 「黄泉比良坂」考—「事戸を度」す場所と関わら  
せて—（『古事記年報』四十二号、2000年1月）。

ち海坂を塞へて返り入りましき。

(記上巻、豊玉毘売の出産)

出産のために葦原中国へやってきた豊玉毘売は海辺で御子(鶺鴒草葺不合命)を生む。その際、山幸彦は「見るな」という禁忌を破るが、そのために豊玉毘売は「海坂」を塞いで本国(海宮)へ返ってしまう。ここで注意されるのは、葦原中国と海宮との間は本来ならば、傍線Eの如く、「海つ道」を通して往来できるはずなのに、傍線Fの如く、豊玉毘売が「海坂」を塞ぐことによって「海つ道」は閉ざされてしまい、両世界の間は行き来ができなくなることである<sup>(4)</sup>。それは、この部分に該当する日本書紀(第十段一書第四)に、「此、海陸相通はざる縁なり」とあることから窺われる。すなわち、「海坂」とは、海宮と葦原中国とを結ぶ唯一の通路だったのである。

「坂」が地域の間(世界の間)を結ぶ唯一の通路であることは、黄泉国と葦原中国との間に存在する「黄泉つひら坂」においても同様である。次の例を見よう。

(4)黄泉つひら坂の坂本に到りましし時に、その坂本なる桃の子を三箇取らして待ち撃ちたまひしかば、ことごと坂を返りき。…いやはてに、その妹伊耶那美の命みづから追ひ来ぬ。しかして、千引きの石をその黄泉つひら坂に引き塞へ、その石を中に置きて、おのおの対ひ立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美の命の言らししく、…(中略)…

(4)「坂」が塞がれるということにおいては「黄泉つひら坂」も「海坂」も同じであるが、「坂」が塞がれた後のことでは両者が少し異なる。というのは、「黄泉つひら坂」が塞がれた後には葦原中国と黄泉国との間の往来の記述が見えない。それに対して「海坂」の場合は、「海坂」が塞がれた後にも豊玉毘売命が妹の玉依毘売命を遣わして御子(鶺鴒草葺不合命)を養育させたり、鶺鴒草葺不合命の御子である稲比命が海原に入るなど、葦原中国と海宮との間に往来の記述が確

かれ、その伊耶那美の神の命を号けて、黄泉津大神といふ。また云はく、その追ひしきしをもちて、道敷の大神といふ。また、その黄泉つ坂に塞りし石は、道反之大神といひ、また塞ります黄泉つ戸の大神ともいふ。(記上巻、黄泉国逃走譚)

黄泉国から逃げ還って来た伊耶那岐命は、傍線Gのように、千引石で「黄泉つひら坂」を塞ぎ、その石を中に置いて伊耶那美命と向かい立って事戸を度す。「黄泉つひら坂」が塞がれた結果については記されていないが、傍線Hの如く、その「坂」に置かれた千引石を「道反之大神」と命名することから、黄泉国のもの等(具体的には伊耶那美命)がその「坂」を越えることなく、そこで折り返されたことが知られる。さらに千引石を「黄泉戸大神」とも命名することから、そこが葦原中国と黄泉国との出入り口でもあることが推測される<sup>(5)</sup>。

このように、「黄泉つひら坂」を塞ぐことは葦原中国と黄泉国との間の通行を遮断することであり、その場合の「坂」とは、両世界を結ぶ唯一の通路、両世界の出入り口であることが分かる。

通路としての「坂」は、世界と間のみならず地域の間にも設けられており、そこを通して人が往来したり、邪気(病気)が共同体内に侵入したりする。次の例を見よう。

(5)この天皇の御世に、疫病多に起りて、人民尽きなむとす。…(中略)…すなはち意富

認できる。

(5)地域と地域の間出入り口としての機能を強調する場合には「坂」よりも「戸」という表現が用いられたようである。垂仁記に、本牟智和氣御子が夢の教えの通り出雲の大神を参拝する場面があり、そこに「那良戸」「大坂戸」「木戸」という表現が見える。このことは、「黄泉つひら坂」に置かれた千引石を「黄泉戸大神」と命名することと関わるのであろう。

多多泥古の命をもちて神主として、御諸山に意富美和の大神の前を拝ひ祭りたまひき。また、伊迦賀色許男の命に仰せて、天の八十びらかを作らしめ、天つ神地つ祇の社を定めまつりたまひき。また、宇陀の墨坂の神に、赤き色の楯矛を祭り、また、大坂の神に、墨き色の楯矛を祭り、また、坂の御尾の神また河の瀬の神に、ことごと遺忘ることなく、弊帛を奉りたまひき。これによりて、疫の気ことごと息みて、国家安平らぎき。（崇神記、三輪山の神を祭る）

国内に疫病が発生して民が苦しむ。その最中、崇神天皇の夢に大物主神の託宣が下り、三輪山の大神を祭るようにと教えられる。崇神天皇は神託の通りに三輪山の大神を祭るわけであるが、その際、三輪山の大神を祭るのに止まらず、傍線部の如く、墨坂神・大坂神をはじめとする四方八方の境界の神（具体的には「坂之御尾神」「河瀬神」。<sup>6)</sup>）に兵器を奉納する。

このように、奈良盆地を取りまく諸々の坂の神（境界の神）に兵器を奉納することは、坂の神の威力を借りて邪気（疫病）を共同体の外側へ追い払おうとするため、あるいは坂の神の威力によって邪気が再び共同体内に入らないことを願った措置であると考えられる。

以上、「坂」の通路としての重要性から、そこにはそれぞれの地域の通行を支配する神（坂の神）がいると想像され、そういった坂の神は、やがては共同体内に安泰をもたらす守護神として信仰される（祭られる）ようになる。

### (3) 要塞

「坂」が地域と地域との間の境界・通路であ

(6) 実際に山に登る際にはよく山の尾根部分を利用する如く、「坂」の通路としての機能を重視した表現が「坂の御尾」ではなからうか。「河の瀬」の場合も同様

る故に、敵対する勢力同士が「坂」を挟んで戦ったり対峙する場合がある。次の例を見よう。

(6)かれ、(太子側が忍熊王側を。引用者注) 追ひ退けて山代に到れる時に、還り立ちて、おのおのおも退か<sup>しりぞ</sup>ずて相戦ひき。しかして、建振熊の命(太子側の將軍。引用者注)、なばかりて云はしむらく、「息長帯日売の命はすでに崩りましぬ。かれ、さらに戦ふべきことなし」といはしめて、すなはち弓絃を絶ちて、欺<sup>いつは</sup>りて帰<sup>かへ</sup>りてぬ。ここに、その將軍(忍熊王側の將軍。引用者注)すでに詐<sup>いつは</sup>りを信けて、弓を弾し兵を蔵めき。しかして、たきまゆかの中より、うきゆづるを採り出でて、さらに張りて追ひ撃ちき。かれ、逢坂に逃げ退きて、対<sup>むか</sup>ひ立ちてまた戦ひき。しかして(太子側は。引用者注)、追ひ迫めて沙沙那美に敗<sup>やぶ</sup>り、ことごとその軍を斬りき。

(仲哀記、香坂・忍熊王の反逆)

皇位継承をめぐる争い場面に、傍線部のように、太子(後の応神天皇)側の軍と忍熊王側の軍とが「逢坂」を挟んで対峙して戦っている。ここで注目されるのは、軍同士が「坂」を挟んで戦うことである。対峙の場所を「坂」にしたのはそこが地域間を結ぶ唯一の通路であるからで、故に、そこを塞いでしまえば敵が自分の領域へ入られない(その逆のこともあり得る)戦略的な要衝地となる。

戦いの場が「坂」であることは日本書紀にも見える。

(7)更に東<sup>い</sup>東<sup>ま</sup>駒山<sup>こ</sup>を踰えて、中洲に入らむと欲す。時に長髓彦聞きて曰はく、「夫れ、天神の子等の来ます所以は、必ず我が国を奪はむとならむ」といひて、則ち盡<sup>つひ</sup>に屬<sup>まは</sup>へる

で、河を渡る際に淵ではなく浅瀬を利用する如く、「河」の通路としての機能を強調した表現が「河の瀬」であると考えられる。

兵を起して、徹りて、孔舎衛坂にして、與  
に會ひ戦ふ。（神武即位前紀、東征）

日向から難波を経て倭へ進入する神武一行とそれを阻止しようとする勢力（長髓彦）とが「坂」を挟んで戦う場面である。長髓彦は生駒山を越えて自分の勢力圏（中洲）に進入する神武一行の行為を、波線部の如く「我が国を奪はむ」と認識し、それを防ごうと、傍線部の如く「孔舎衛坂」を塞いで戦うのである。このように、敵対する勢力同士の戦いの場所が他にもない「坂」であることは、そこが攻守を問わず戦略上重要な場所（すなわち要塞）であるからだろう。

要塞としての場所は「坂」のみならず、次の、「河」を挟んで対陣する例が見える。

(8)ここに、山代の和訶羅河に到りし時に、その建波邇安の王、軍を興して待ち遮り、おものおも河を中に挟みて対ひ立ちて、相  
挑みき。（崇神記、建波邇安王の反逆）

崇神天皇の命令によって高志国の遠征に赴く大毘古命が建波邇安王の謀反を察知して討伐に向かう場面で、傍線部のように、大毘古命の軍（天皇側）と建波邇安王の軍（反乱軍）とが「河」を挟んで対峙する。この場合の「河」はたやすく越えることのできない要害であり、要害であるからこそ地域の間を引き分ける境界となるのである。「河」に引き分けられている勢力同士が敵対関係になると、そこを塞いで対峙するのだと考えられる。

このように、「坂」や「河」は、普段は地域の間を結ぶ通路であり、地域の間を引き分ける境界であるが、有事時にはそこが両勢力の戦いの場所・対峙の場所となる。さらに次の例を見よう。

(9)そこ（宇陀。引用者注）より幸行して、忍坂の大室に到りましし時に、尾生ふる土雲  
八十建、その室にありて待ちいなる。かれ

しかして、天つ神の御子の命もちて、饗を八十建に賜ひき。ここに、八十建に宛てて八十膳夫を設けて、人ごとに刀佩けて、その膳夫等に誨へて曰らししく、「歌を聞かば、一時共に斬れ」。……（神武記、東征）神武東征の場面であるが、神武側は「忍坂」の大室を攻略するために八十建を欺いている。それは八十建があまりにも勇猛であるために正々堂々と戦っては勝ち目がないと判断したからであろうが、「坂」の観点からすると、「忍坂」の大室が難攻不落の要塞であるからだとも考えられよう。

「坂」で相手の勢力（坂の神として現れる）を追い伏せることが国内の平定につながる例が倭建命の東征伝承に見える。

(10)そこ（上総国。引用者注）より入り幸して、ことごと荒ぶる蝦夷等を言向け、また山河の荒ぶる神等を平和して、還り上り幸しし時に、足柄の坂本に到りて、御糧食す処に、  
その坂の神、白き鹿に化りて来立ちき。しかしてすなはち、その昨ひ遺したまへる蒜の片端もちて、待ち打ちたまへば、その目に中るすなはち打ち殺さえき。かれ、その坂に登り立ちて、三たび歎かして、「あづまはや」と詔云らしき。

（景行記、倭建命の東征）

(11)その国（甲斐国。引用者注）より科野の国に越えて、すなはち科野の坂の神を言向け  
て、尾張の国に還り来て、先の日に期りたまひし美夜受比売の許に入りましき。

（景行記、倭建命の東征）

対立する勢力同士の衝突の場である「坂」で倭建命に言向けられる「坂の神」（足柄の坂の神・科野の坂の神）は、倭建命の侵攻を阻止しようとする勢力、さらには大和政権に敵対する勢力を象徴するものとして捉えた表現であると考え



られる。倭建命はそういった「坂の神」を殺してから足柄坂(峠)を越えることができ、「坂」に登り立って東国の領有を宣言すること(アツマハヤ)ができたのである。

このように、「坂の神」を殺す(言向ける)ことは、相手の勢力を征圧することであり、相手の領土を領有することなのである。

さて、ここで「坂の神」の二重性格について少し触れておきたい。先の(10)(11)の如く、戦いの場において境界(=坂)に現れる「坂の神」は敵対勢力の象徴的な表現であることからその「坂の神」は当然征伐(コトムケ)の対象となる。一方、(5)の「墨坂の神」「大坂の神」といった「坂の神」は外部から侵入する邪気や病気が共同体内に入ることを塞いでくれる守護神として共同体内の成員に崇められる信仰の対象であることは先述の通りである。

すなわち、「坂の神」は、一方では征伐の対象となり、他方では信仰の対象となるが、それは「坂の神」を捉える観点の相違であって、基本的には「坂」の境界・通路・要塞としての性格に起因するものであると考えられる。

以上、「坂」は「河」とともに要害であり、隣接する勢力圏同士の境界(接点)である。また戦いの場においての「坂」は対立する勢力同士の衝突の場所となり、その敵を「坂」で追い払うことが敵対勢力を制圧すること・敵対地を領有することの象徴的な表現であることが分かる。

#### (4) 呪的な場(祭祀の場)

「坂」の通路としての重要性からそこが祭祀の場となることについては(5)で述べた通りである。「坂」が祭祀の場としての機能を獲得する

ためには、祭祀の対象である神格(神・神に仕える巫女など)が「坂」に現れなければならないわけで、実際に「坂」に神が現れて予言をしたり、「坂の神」に国内安泰を祈願したりする例が見える。

(12)かれ、大毘古の命、高志の国に罷り行きし時に、腰裳服せる少女、山代のへら坂に立ちて、歌ひしく、…(歌謡略)…ここに、大毘古の命、恠しと思ひ、馬を返し、その少女に問ひて日ひしく、「ながいへる言は、何の言ぞ」。しかして、少女が答へ日ひしく、「あは言はず。ただ歌を詠へるにこそ」といひて、すなはちその所如も見えずて、たちまちに失せにき。

(崇神記、建波邇安王の叛逆)

大毘古命が遠征のために高志国へ赴く際に、「山代のへら坂」に腰裳をつけた少女<sup>(7)</sup>が現れて歌を歌う(原文には「詠」とある)。その歌の内容は建波邇安王の謀反を予告するものである。

しかし、その少女は「吾は言はず」と言っていることから、この歌が少女の口を借りた神託であると考えられる。さらに、少女自身も「行方も見せず忽ち姿を消してしまう」行動をとっており、神的な存在であることをほのめかす。

このように、神的な存在が「坂」に現れることが重要で、それは、「坂」が境界として、また通路として共同体内の人々に重んじられるようになり、そういった意識から「坂」には神が現れると信じるようになったのであろう。「坂」に神が現れることは「坂の神」という熟語からも窺える。

さて、次に引く履中記の例と(12)の崇神記の例とを比較しながら、「坂」に現れるものに神性

(7)腰裳を着ていることについて、新潮日本古典集成『古事記』は「少女が神女であることをにおわす」と

注している。腰裳の例証が他になく未詳であるが、その指摘に従いたい。

が認められるかどうかを考えてみることにする。  
次の例を見よう。

⑬かれ、大坂の山の口に到り幸しし時に、一の女人に遇ひたまひき。その女人の白ししく、「兵を持てる人等、多にこの山を塞へたり。当岐麻道より廻りて越え幸すべし」。しかして、天皇の歌ひたまひしく、…（歌謡略）…かれ、上り幸して石上の神の宮に坐しき。（履中記、墨江中王の反逆）

皇位を狙う墨江中王は履中天皇が酒に酔って寝ている間に難波宮に火をつける。間一髪で逃げ出した履中天皇は大和を目指して脱出する際に大坂の山口<sup>(8)</sup>で一人の女人に出会い、その女人から当岐麻道へ迂回するように進められる。この場合の女人の言葉は歌ではない。また、崇神記の少女のように突然消えることもない。よって、その少女からは神性が見出せない。

それでは、状況的に類似するこれら二例の根本的な相違点は何だろう。少女の予告（教え）が一方は歌であり他方は単なる言葉であるという違いもさることながら、少女が現れる場所に焦点を当てて比較してみると、一方は「山代のへら坂」であり他方は「大坂の山口」であって、後者の場合は「坂」ではない。そこに神的なものが現れるかどうか（神性を感じるかどうか）は、その場所が「坂」なのかどうかと関わるのではなからうか。

そのような観点から、古事記の中の「坂」に神が現れたり、「坂」で神を祭ったり（呪術的な行為を行ったり）する例を整理すると、次のようになる（重複する例もあるが、再び引用する）。

①また、宇陀の墨坂の神に、赤き色の楯矛を祭り、また、大坂の神に、黒き色の楯矛を

祭り、また、坂の御尾の神また河の瀬の神に、ことごと遺忘ることなく、幣帛を奉りたまひき。これによりて、疫の気ことごと息みて、国家安平らぎき。

（崇神記、三輪山の神を祭る）

②かれ、大毘古の命、高志の国に罷り行きし時に、腰裳服せる少女、山代のへら坂に立ちて、歌ひしく、…（歌謡略）…少女が答へ曰ひしく、「あは言はず。ただ歌を詠へるにこそ」といひて、すなはちその所如も見えず、たちまちに失せにき。

（崇神記、建波邇安王の反逆）

③…天皇の答へ詔らししく、「こは、山代の国なる、わが庶兄建波邇安の王の邪き心を起しし表とするのみ。伯父、軍を興して行すべし」とのらして、すなはち丸邇の臣が祖、日子国夫玖の命を副へて遣はしし時に、すなはち丸邇坂に忌瓮を据ゑて罷り行きき。…（崇神記、建波邇安王の反逆）

④足柄の坂本に到りて、御糧を食す処に、その坂の神、白き鹿に化りて来立ちき。

（景行記、倭建命の東征）

⑤すなはち科野の坂の神を言向けて、…

（景行記、倭建命の東征）

①については既に(5)で触れたが、「坂の神」を祀ることはその神（境界の神）の威力を借りて共同体内に邪気が入ってくるのを防ごうとした措置であると考えられる。また②は高志国へ赴く大毘古命が「山代のへら坂」に現れた少女から神託（国内に謀反が発生すること）を受ける場面で、この場合の少女が神らしきものであることは先述の通りである。③は出陣の際に「丸邇坂」に忌瓮を据えて「坂の神」に武運と国内安泰を祈願する場面で、境界に「忌瓮を据ゑ」

(8)河内と大和との境の穴虫峠の入口で、河内側から穴虫峠を越えようとしたが、少女の教えに従って当麻道

から迂回した（新編日本古典文学全集『古事記』の注）。

て神祭りする例が孝靈記にも見える。

(14)大吉備津日子の命と若建吉備津日子の命の二柱相副ひて、針間の氷河の前に、忌瓮を据ゑて、針間を道の口として、吉備の国を言向け和しき。(孝靈記、吉備の国平定)「氷河の崎」は大和朝廷と吉備国との境界であろうと思われ、そのような河崎で神祭りが行われるのは、先述した「河」の境界としての機能が重要視されたからであろう。河崎に「忌瓮を据ゑて境界の神を祭るのは③と同様に、出兵の武運と国内安泰を祈願する行為であると考えられる。さらに④⑤の場合は、倭建命の平定の場合において相手側の勢力が「坂の神」と表現され、そういった神は境界である「坂」に現れるのである。

このように「坂」は、「神」または「神性をもつもの」が現れて予言をする場所(呪的な場)、国内安泰と武運を祈願して祭祀が行われる場所(祭祀の場)なのである。

なお、古事記の中に「坂」が呪的な場・祭祀の場として用いられる例が崇神記と景行記に集中するという興味深い傾向について少し触れておきたい。

まず崇神記の場合、神々によって統治されてきたこの国が崇神天皇の御世になると神々に代わって天皇が自ら国を統治する(初国知らず)ことになる。が、神々の統治(影響力)から完全に解放されたわけではない。天皇の政は神々の庇護の上で成り立ったものであると考えられる(肯定的な神)。

また景行記の場合は、倭建命が国内平定のために活躍する時代で、大和朝廷に敵対する勢力が「坂の神」<sup>(9)</sup>として現れることと関わるので

あろう(否定的な神)。

ともかく、大和朝廷が神と関わりながら国内の統一を成し遂げていくことが注目される。さらにいうと、崇神記も景行記も古事記の中巻に位置していて、神々のことを記す上巻と歴代天皇の政を記す下巻との間にこれらが位置することは、神々のことと関わり深い古事記の中巻の性格とも見合っていると思われる<sup>(10)</sup>。

## 2. 「坂」の形状

それでは、以上の機能を持つ「坂」は古代人にどういう形のものとしてイメージされていたのであろうか。先述した「坂」の機能を抽象化すると、おおよそ次のように描けよう。ある地域と地域—この地域とは人間が支配し居住活動をするとところである—との境に山嶺が横たわる場合、その地域の間を連絡する通路が「坂」である。その事情をよく表している例が日本靈異記に見える。

(15)紀伊の国海部の郡仁嗜の濱中の村に、一の愚癡の夫有り。…海部と安諦とに通ひて往き還る山に、山道有り。號けて玉坂と曰ふ。

(日本靈異記・下巻、第二十九話)傍線部の如く、海部と安諦とを往来する山道が「玉坂」であるとされる。この場合の「坂」とは単なる山の斜面ではない。山の斜面のうちで特に通路として機能する一部分を「坂」と称するのである。そのことは次の例からも窺われる。

(16)初め、大后、日下に坐しし時に、日下の直越の道より、河内に幸行しき。しかして、山の上に登りて、国内を望けたまへば、…(中略)…ここをもちて、宮に還り上りま

(9)厳密には「荒ぶる神」「道速ぶる神」「山の神」「河の神」「穴戸の神」「坂の神」。

(10)日本古典文学大系『古事記 祝詞』の解説(16~19頁)

において倉野憲司氏は、古事記の上巻が神々の物語を記し、中巻が神と人との物語を記し、下巻が人々の物語を記すと述べる。



す時に、その山の坂の上に行き立たして、  
歌ひたまひしく、…

(雄略記、若日下部王を妻問う)

雄略天皇が妻問いのために「日下之直越道」を  
通って河内に出かける。しかし帰京の際には、  
傍線部の如く、「其山之坂上」に登り立って歌  
を歌う。ということは、雄略天皇がその山にあ  
る「坂の上」を通ったことになり、この場合の  
「坂」とは、山のうち特に通路として重要視さ  
れる一部分(=山道)であると考えられる。

さらにこの例は、波線部の如く、天皇が「山  
上」に登って国見を行うことが注目される。国  
見の場所として「山上」が選ばれたのは、そこ  
が高く見晴らしがよいからであろう。そういつ  
た国見の場所(山上)が帰京の際には、傍線部  
の如く、「其山之坂上」と記されており、「其山  
之坂上」とは、地域の間山嶺が横たわって  
いて、それを越える山道(=坂)のうち「山上」  
に相当する部分であると考えられる。「(其山之)  
坂上」と「山上」とは、結果的には同じ部位を  
指すことになるが、特に通路として機能する場  
合の表現が「(其山之)坂上」なのである。

国見の場所として「坂上・坂」が用いられる  
例は上代文献にしばしば見られる。次の例を見  
よう。

(17)足柄の坂本に到りて、…(中略)…かれそ  
の坂に登り立ちて、三たび歎かして、「あ  
づまはや」と詔云らしき。かれ、その国を  
号けて、阿豆麻といふ。

(景行記、倭建命の東征)

(18)鏡坂 昔者、纏向の日代の宮に御宇しめし  
天皇、此の坂の上に登りて、国形を御覧  
して、即ち勅りたまひしく、「此の国の地  
形は、鏡の面に似たるかも」とのりたまひ  
き。因りて鏡坂といふ、斯れ其の縁なり。

(豊後国風土記、日田郡)

(17)は倭建命が「足柄坂」に登って東国を見下ろ  
しながらその地に「アヅマ」という国号を与え  
る場面である。また(18)は景行天皇が国内を巡幸  
する際に「鏡坂の坂上」から国形を眺める場面  
である。

このように、「坂」「坂上」での天皇の行為は  
儀礼的・呪術的な意味を持ち、その際発せられ  
た言葉はそのままその地の地名となることが分  
かる。すなわち「坂(上)」とは、国の形(属  
性)を一目で見下ろせる高いところ、見晴らし  
のよいところなのである。

さて、「坂」の形状を考えるのに、倭建命が  
東征から帰京する際の「科野の坂」当たりの記  
述が参考となろう。その場面の古事記と日本書  
紀との記述を比較してみる。

(19)その国(甲斐国。引用者注)より科野の国  
に越えて、すなはち科野の坂の神を言向け  
て、尾張の国に還り来て、先の日に期りた  
まひし美夜受比売の許に入りまじき。

(景行記、倭建命の東征)

(20)則ち日本武尊、信濃に進入しぬ。…(中略)  
…日本武尊、烟を披け、霧を凌ぎて、遙に  
大山を徑りたまふ。既に峯に速りて、飢れ  
たまふ。山の中に食す。山の神、王を苦び  
しめむとして、白き鹿と化りて王の前に立  
つ。王異びたまひて、一箇蒜を以て白き鹿  
に弾けつ。則ち眼に中りて殺しつ。爰に王、  
忽に道を失ひて、出づる所を知らず。時に  
白き狗、自づからに來て、王を導きまつる  
状有り。狗に随ひて行でまして、美濃に出  
づること得つ。…(中略)…是より先に、  
信濃坂を度る者、多に神の氣を得て瘡え臥  
せり。但白き鹿を殺したまひしより後に、  
是の山を躑ゆる者は、蒜を嚼みて人及び牛  
馬に塗る。自づからに神の氣に中らず。

(景行紀、倭建命の東征)

まず古事記の場合、倭建命の帰京のルートは甲斐国（山梨県）より科野国（長野県）に入り、科野の坂の神を言向けてから尾張国（愛知県西部）へ入ったとされる。ここでいう「科野坂」（日本書紀の場合は信濃坂）とは、信濃国と美濃国との間にある神坂峠であるとされるが、和銅六年に木曾路（岐阜県中津から長野県塩尻までの木曾街道）が開通される以前には、この陰路が信濃国と美濃国との間を結ぶ重要な通路だったのである<sup>(11)</sup>。

その点を押さえた上で日本書紀の記述を見ると、日本書紀の場合は信濃国から信濃坂を越えて美濃国（岐阜県南部）に出たとある。ここで注目されるのは、古事記には美濃に関する記述が見えないのもさることながら<sup>(12)</sup>、傍線部の如く、「信濃坂」が「峰」とも「山」とも言い換えられていることである。「坂を度る」ことの具体的な行為は傍線Gの「険しい山道を押し分けて遙か大山を通りすぎて峯に速る」ことであると考えられるけれども、それはまた傍線Iの「山を踰える」とも表現される。

すなわち「坂を度る」ことは、「峯に速る」ことであり「山を越える」ことなのである。

「坂」と「峰」が置換される例として、出雲国風土記の大原郡では「林垣坂」とあるものが、意宇郡では「林垣峰」と見える。この「林垣坂・林垣峰」はこれら二郡の境にあるので、同じ地域を指すと考えられる。が、両者がまったく同じ場所を指しているとは思われない。次の例を見よう。

①)日本武尊、…（中略）…則ち甲斐より北、

武蔵・上野を転歴りて、西碓日坂に速ります。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓日嶺に登りて、…

（景行紀、倭建命の東征）

日本武尊が「西碓日坂」に「速」って、さらにその道筋をたどって「登」ったところが「碓日嶺」であるとされる。この場合の「峰」とは山の頂であり、「峯」を含む山嶺を越える山道が「坂」であると考えられる。つまり、「峰」は山の高さによる分類概念であるが、「坂」は山（山嶺）の中でも特に通路として機能する山道（＝坂）を指す言葉なのである<sup>(13)</sup>。

ところで、これまで述べてきた「坂」は、「越える（度る）」ものであり、「登り」「立つ」ものとして描かれていた。ということは、「坂」は、一般的に「登り坂」として意識されていたのかも知れない。しかし、「坂」を下ることに意味がある場合には「下り坂」の記述も見える。

②)大伴連忍勝は、信濃の国小縣の郡嬢の里の人なり。…死にて五日を歴てすなはち甦り、…往く道の頭に基だ峻シキ坂有り。坂の上に登りて、躊躇ヒテ見れば、三つの大きな道有り。…衢の中に王有り。…纒放たれて、還り来り、三つの大きな衢を過ぎ、坂よりして下り、即ち見れば、甦返りぬ。

（日本霊異記・下巻、第二十三話）

一度死んだ男が険しい「坂」より下ったら生き返ったという話で、このように「坂を下る」ことに特別な意味がある場合には「下り坂」も描かれるのである<sup>(14)</sup>。

以上のことから、古事記における「坂」の形

(11)新編日本古典文学全集『日本書紀』の頭注。

(12)古事記に美濃の記述が現れないのは、美濃については記すべき事績がなかったからかも知れない。あるいは、「科野坂」が美濃へ通ずる道であることが明らかであるために割愛されたのかもしれない。

(13)その点については拙稿「黄泉比良坂」考一「事戸

を度」す場所と関わらせて一」（『古事記年報』四十二号、2000年1月）において、地域の間山（山嶺）が横たわっている場合、その地域間を通過する一本の山道が「坂」であり、その山の頂である「嶺」に相当する山道が「坂上」であることを述べた。

(14)古事記の「坂」に関する記述には「坂を下る」とい

状を描くと、地域の間には山嶺が横たわっている場合、それを越える一本の山道がイメージできる。こういった山道には、黄泉つひら坂の「坂本」という表現から平地から傾斜地の山道にさしかかる麓の部分が、また「其の山の坂の上に行き立つ」「坂に登り立つ」といった表現から山道の中でも高く眺望のよいところ（山道の最も高いところ。現代語では峠に当たろうか）が、さらには「坂上=峠」を越えて他方の麓までの道筋が含まれるのだと考えられる。これが、古事記の描写する「坂」の形状なのである。そういった機能・形状を持つものとして「坂」は、黄泉国・根の堅州国・海宮と葦原中国との間に据えられたのである。

### おわりに

人間社会において、自分が属する共同体の外側は未知の世界であり、そのために、そこには恐ろしい黄泉軍とか荒ぶる神どもがいると想像され、恐怖の対象となるのである。そういった共同体の内側と外側は、地形的に山坂や河川といったものが地理的な境界をなして、そこから境界という概念が「サカ=坂」として定着するようになったと思われる。

このような地域と地域（世界と世界）との間に用いられる「坂」は、地域の間を引き分ける境界として、また、たやすく越えられない要害として、さらに、地域の間をつなぐ重要な通路として機能する。「坂」の通路・境界としての

重要性から、そこで国家安泰を祈願する祭祀が行われたり、守護神が現れて神託を下したりする。すなわち「坂」は、その機能の重要性から古代人に神格化され得たのである。

以上のような機能を持つ「坂」は、その形状をイメージしてみると、一方の麓から登り、峠を越えて、他方の麓に至るまでの山道であると考えられる。

しかし、大和朝廷の平定が進み、国内が統一されていくにつれて境界としての「坂」の機能が次第に薄れていくように思われる。また、国内安定に伴う交通路の整備や地域間の頻繁な往来によって、要害としてのイメージも緩和され、「坂」の向こうも未知の世界でなくなってしまい、「坂」の呪術性や象徴性も薄れていく。つまり、神話の世界と深く関わった「坂」もその機能が次第に薄れて行くとともに物語の舞台から次第に姿を消すようになる<sup>(15)</sup>のである。

### 【参考文献】

- ・西郷信綱『古代人の夢』（平凡社、1972）
- ・神野志隆光『古事記の世界観』（吉川弘文館、1986）
- ・赤坂憲雄『境界の発生』（砂子屋書房、1989）
- ・三浦佑之「境界—〈坂〉をめぐる—」（上代文学会編『万葉の歌と環境』、笠間書院、1996）
- ・前田晴人『日本古代の道と衢』（吉川弘文館、1996）

↘う表現は見えないが、坂より「返る」「逃げる」という表現が見える。そのうち「坂より逃げる」場合は、皇位継承をめぐる太子（後の応神天皇）と忍熊王とが争う場面に忍熊王が逢坂に「逃げ退きて」陣を構えたとある。が、太子側の軍に追い攻められてササナミで敗北する。この場合の逢坂は、前後の状況から、また「ササナミ」という表現から、琵琶湖側の下り坂で

あることと解される。あるいは「坂より逃げる」ことが「坂より下る」ことを暗黙のうちに表しているかも知れない。

(15)時代とともに「坂」が変遷することについては十分に考察することができなかった。また機を改めて述べることにしたい。

〔付記〕

本稿は、1994年度に提出した修士論文（大阪市立大学文学研究科）を改稿したものである。先行研究については、修士論文をまとめる段階において本稿とかかわって論じたものがなかったため触れなかった。なお、本文引用について

は、最新の研究成果が盛り込まれている新編日本古典文学全集『古事記』・『日本書紀』・『風土記』（小学館）、新古典文学大系『日本靈異記』（岩波書店）を引用すべきであったが、できる限り修士論文を生かそうとした。